

競技性の高い知的障害者スポーツにおける 新しいエリジビリティグループ（II 2 および II 3）の 導入の意義と問題点について

——ブリズベン2019 INAS グローバルゲームズの事例より——

谷 口 広 明 齋 藤 利 之
宮 崎 伸 一

1. はじめに

国際知的障害者スポーツ連盟（2019年10月に INAS から Virtus に改称、以降「Virtus」と称す）は、知的障害のある選手を対象としたスポーツの国際統括団体であり、毎年陸上競技や水泳など10を超える競技の世界選手権を開催し、4年ごとに競技性の高い複数スポーツの総合大会である「グローバルゲームズ」を開催している¹⁾。

Virtus の競技大会に出場するためには、Virtus が定める「エリジビリティ (Eligibility)」の資格を有している必要がある。これまでの「エリジビリティ」は、WHO による国際疾病分類 (ICD-10) の「知的障害」の診断基準に準拠した Intellectual Impairment 1 (以降「II 1」と称す) のみであった。II 1 取得には、IQ75以下で、適応制限があり、18歳未満に障害が発症している必要があるが²⁾、実際に II 1 を取得する選手の多くは IQ60以上で、身体的障害を伴わない場合が多い。競技者の絶対数が少ないため、IQ と競技力との相関関係は認められていないものの、例えば IQ55以下の選手は、ダウン症などその他の障害を併発している傾向があり、知的障害だけの選手と比べ競技力が劣っている可能性が示唆されてきた³⁾。そのため、ダウン症などのより障害が重い選手を対象としたエリジビリティの新設によって競技の公平性の向上が求められ

ていた。また、それまでIQ75を超える高機能自閉症の選手を対象とした国際統括団体が存在せず、当該自閉症の選手が活躍できる競技大会がほとんど存在しないため、このような選手のための新しいエリジビリティの設置が求められていた⁴⁾。

そこでVirtusは、2013年にエリジビリティ新設のための研究班を設置し、2015年に同研究班により、ダウン症などのより障害が重い選手を対象としたIntellectual Impairment 2 (II2)と、IQ75を超える高機能自閉症の選手を対象としたIntellectual Impairment 3 (II3)が提案された。これらの新しいエリジビリティグループは、2016年Virtus陸上世界選手権大会(タイ)、2017年卓球選手権大会(チェコ)、2017年Virtus水泳選手権大会(メキシコ)、2018年Virtusスキー世界選手権大会(フランス)と、2018年Virtusヨーロッパサマーゲームズでは陸上競技、水泳、卓球において導入され⁵⁾、ついにブリズベン2019 INASグローバルゲームズ^{註1)}(以降「ブリズベン大会」と称す)において、グローバルゲームズとして初めてII2とII3の競技種目が導入された⁶⁾。

2. ブリズベン2019INASグローバルゲームズの概要

2000年に開催されたパラリンピックシドニー大会の知的障害男子バスケットボール競技において、金メダルを獲得したスペイン代表チームの選手の大半が健常者であったことが判明し、国際パラリンピック委員会は、知的障害選手のクラス分けシステム(クラシフィケーション)が確立するまでの間、知的障害を対象とした競技種目をパラリンピック競技大会から除外した。Virtusは、多くの知的障害選手が国際舞台における活躍の場を失ったことに対し、パラリンピックに準じた競技性の高い複数スポーツの総合大会として2004年に発足させたのがグローバルゲームズであり、現在に至っている⁷⁾。なお、2012年に開催されたパラリンピックロンドン大会より、知的障害を対象とした競技種目が陸上競技、水泳、卓球の3競技において復活し⁸⁾、現在、知的障害選手が出場可能な競技性の高い複数のスポーツの競技大会として、パラリンピックとグローバルゲームズが存在している。

このような歴史的な背景を下に、2019年10月に第5回目となるグローバルゲームズがオーストラリアのブリズベン市で開催され、47カ国から約1,000人の選手が参加した⁹⁾。同市は、2032年に開催されるオリンピック・パラリンピック競技大会の招致を表明している都市でもあり¹⁰⁾、このような国際大会の開催を通して、観光産業の繁栄と、市民のスポーツを通じた健康的で活動的な都市を目標としている。さらに「A City for Everyone: Inclusive Brisbane Plan 2019-2029」の下、障害者のスポーツ競技大会を通じた障害者の包括や共生社会の構築にも力を入れている¹¹⁾。一方Virtusは、創立以来競技性の高いスポーツ競技大会を通じたインクルーシブな

社会の構築を目指しており¹⁾, プリズベン大会では, 上掲の通り II 2 と II 3 の 2 つの新しいエリジビリティを導入し, 主催者 Virtus と開催地プリズベン市両者の理念を具現化した大会となった。以下に, プリズベン大会の概要を示す。

表1 プリズベン大会概要

大会名称	INAS Global Games Brisbane 2019
開催地	オーストラリアクイーンズランド州プリズベン市
大会期間	2019年10月12日から19日までの8日間
参加国	47カ国(選手派遣国45カ国, 視察者派遣国2カ国)
参加者数	941人(競技エントリー者816人, デモイベント参加者125人)
参加資格(エリジビリティ)	II 1 (公式), II 2 (新規公式), II 3 (非公式)
実施競技種目	10競技(陸上競技・水泳・卓球・自転車・ローイング・フットサル・バスケットボール・テニス・テコンドー)とデモイベント2競技(オーストラリアンフットボール・ネットボール)

プリズベン大会関係者から得られたデータを基に筆者が作成

2-1. プリズベン大会における II 2 と II 3 の導入状況

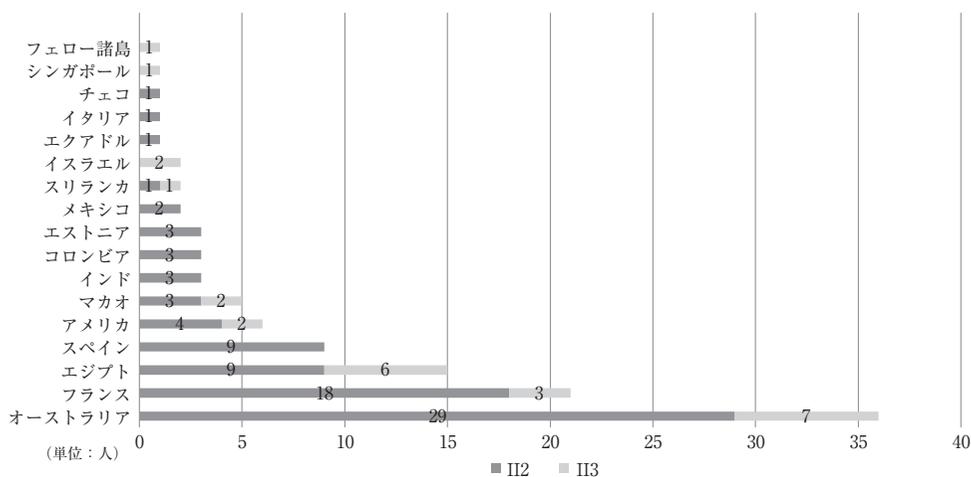
プリズベン大会では, II 2 は公式競技として実施され, II 3 は非公式競技として実施された。その理由として, II 2 のエリジビリティ判定基準がプリズベン大会までに制度化されていたのに対し, II 3 は登録者数が少なく, 医科学的検証に求められるデータ数が十分ではなかったこと³⁾が原因であると考えられる。

プリズベン大会関係者から得られたデータ¹²⁾によると, プリズベン大会にエントリーした選手のエリジビリティの内訳は, II 1 (704人), II 2 (87人), II 3 (25人)であり, 全体のエントリー者数の約13%が新しいエリジビリティグループの選手であった。

新しいエリジビリティグループの選手派遣国を図1に示す。新しいエリジビリティグループの選手派遣国は全45カ国中17カ国(37.8%)であったが, 10人以上の選手を派遣した国はわずか3カ国であり, 組織的な選手派遣は一部の派遣国に限られていたことがうかがえた。

次に, 新しいエリジビリティグループの選手派遣上位5カ国と日本の派遣選手のエリジビリティの内訳を以下に示す(表2)。上位5カ国中4カ国においてII 1の選手派遣比率が約7割を占めていたことに対し, エジプトだけが, II 2の選手派遣比率がII 1やII 3の選手のそれよりも高かった。

派遣選手数においては, 自国開催であるオーストラリアが, 全体で最も多い175人の選手を派遣し, 新しいエリジビリティグループ(II 2:29人, II 3:7人)においても最も多くの選手を



プリズベン大会関係者から得られたデータを基に筆者が作成

図1 新しいエリジビリティグループの派遣国と派遣選手数

派遣していた。フランスは地理的に遠方にもかかわらず全体で83人と2番目に多くの選手を派遣し、新しいエリジビリティグループ（II2：18人，II3：3人）においても2番目に多くの選手を派遣していた。スペシャルオリンピックス^{註2)}の発祥の地であるアメリカは、全体で22人の選手を派遣し、新しいエリジビリティグループ（II2：4人，II3：2人）においては5番目に多くの選手を派遣していた。合計57人と全体で3番目に多くの選手を派遣した日本から、新しいエリジビリティグループの選手派遣はなかった。

表2 II2とII3の選手派遣上位5カ国と日本の派遣選手のエリジビリティの内訳

国名	エリジビリティ			合計
	II1	II2	II3	
オーストラリア	139 (79.4)	29 (16.6)	7 (4.0)	175
フランス	62 (74.7)	18 (21.7)	3 (3.6)	83
エジプト	5 (25.0)	9 (45.0)	6 (30.0)	20
スペイン	25 (73.5)	9 (26.5)	0 (0.0)	34
アメリカ	16 (72.7)	4 (18.2)	0 (9.1)	22
日本	57 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	57

単位:人 (%)

プリズベン大会関係者から得られたデータを基に筆者が作成

次に、大会ホームページから入手した全種目の公式リザルト¹³⁾から、新しいエリジビリティグループが実施された競技と種目を以下に示す(表3)。ブリズベン大会における新しいエリジビリティグループの実施競技は、陸上競技、水泳、卓球、テニスであり、テニスについてはII2のみ実施された。また、新しいエリジビリティグループの実施競技は全て個人競技であり、団体競技は実施されなかった。競技によってはリレー種目やダブルス種目が実施されたが、陸上競技と水泳において出場選手が1人の個人種目が複数存在した。

表3 II2とII3の実施競技種目

競技名	エリジビリティ	
	II2	II3
陸上競技	18種目(個人競技のみ)	13種目(個人競技のみ)
水泳	45種目(リレー含む)	20種目(個人競技のみ)
卓球	シングルス、男子ダブルス、女子ダブルス、混合ダブルス	シングルス、混合ダブルス
テニス	シングルス	非実施

各競技に出場した新しいエリジビリティグループの選手数について、上掲した大会公式リザルト¹⁴⁾から算出した(表4)。両エリジビリティともに水泳の出場者数が一番多く、次いで陸上競技、卓球、テニスの順であった。

表4 II2とII3の競技別出場者数

競技名	エリジビリティ		合計
	II2	II3	
陸上競技	16	7	23
水泳	44	16	60
卓球	12	4	16
テニス	4	0	4
合計	76	27	103

単位:人

2-2. 新しいエリジビリティを導入したブリズベン大会の意義

ブリズベン大会にエントリーした選手全体の約13%が新しいエリジビリティグループの選手であった。そこで、2018年7月と2020年9月時点におけるVirtusの全登録者が記載されているマスターリストの登録者数^{4) 14)}を比較すると、この時期に各エリジビリティにおいて登録者が

増加しており、その内訳はII 1 (45人)、II 2 (26人)、II 3 (51人)であり、新しいエリジビリティグループの新規登録者が6割を超え、その潜在的な需要が示唆された。

表5 Virtus マスターリスト登録者数の比較

発行年月	エリジビリティ			合計
	II 1	II 2	II 3	
2018年 7月	5,352 (97.3)	138 (2.5)	10 (0.2)	5,500
2020年 9月	5,397 (96.0)	164 (2.9)	61 (1.1)	5,622
増加数	45 (36.9)	26 (21.3)	51 (41.8)	122

単位:人 (%)

II 2の選手は、これまでII 1の選手としてVirtusの競技大会に出場するか、スペシャルオリンピックスに出場するかのどちらかの選択肢しかなかったと思われる。また、II 3の選手は、これまで該当する国際統括団体が存在せず、世界的な競技大会における活躍の機会がほとんどなかったと考えられる。このような状況において、プリズベン大会より2つの新しいエリジビリティが導入され、より競技性の高いスポーツ競技が行えたことは、より多くの障害者に競技性の高いスポーツに参加する機会を創出した点で意義深いといえる。

2-3. 新しいエリジビリティの課題

新しいエリジビリティの判定基準について、II 2は制度化されているものの、後の検証によってモザイク型のダウン症がII 1のエリジビリティに変更になり、また環椎軸椎不安定症(AAI)^{註3)}の合併の有無が議論されるなど現在も流動的である⁴⁾。II 3は、今後判定基準の確立と公式競技化が期待されているが、プリズベン大会では非公式でトライアルであったことが派遣選手数が伸びなかった原因の一つであると考えられる。このような不確定要素がある中で、組織的な選手派遣が行えない国があるものと考えられた。また、プリズベン大会における新しいエリジビリティグループの導入は、陸上競技や水泳などの個人競技に限られたが、今後登録選手と選手派遣国が増えることで、実施競技が団体競技にまで広がることが期待される。

3. 日本国内における取り組みと課題

国内の障害者のスポーツは、日本障がい者スポーツ協会によって統括され、知的障害者の競技連盟は同協会の内部組織である日本パラリンピック委員会(以降「JPC」と称す)によって

統括されている。JPCは、国の助成金を戦略的に競技団体に分配し競技力の向上に努めている。

一方、現在、日本国内における知的障害者スポーツを統括している団体は、全日本知的障がい者スポーツ協会（以降「ANISA」と称す）である。ANISAは、2000年に発足した、NPO法人日本知的障害者スポーツ連盟（2017年解散）の後を受け、2018年5月に発足しており、現在、12のスポーツ競技団体と全国手をつなぐ育成会連合会、公益財団法人日本ダウン症協会および全国特別支援学校知的障害教育校長会（協力会員）の合計15の団体で構成されている¹⁵⁾。特に国際大会の派遣に関しては力を入れており、スウェーデン大会からプリズベン大会まで、JPCと連携して日本選手団を派遣している。

JPC、ANISA、各競技団体の連携により、プリズベン大会には、日本選手団総勢91名が派遣され金9個、銀12個、銅15個の合計36個のメダルを獲得し、金9個は過去最高の成績であった¹⁶⁾。一方で、新しいエリジビリティグループの選手派遣には至らず、ANISAは2023年に開催される第6回グローバルゲームズフランス大会（ヴィシー市）¹⁷⁾における選手派遣に向け、ダウン症に関する専門医を講師として招聘し、関係競技団体向けの研修会を実施するなど準備を進めている¹⁸⁾。さらに、2020年8月に宮崎県宮崎市で行われた「第12回宮崎県チャレンジアスリート記録会」において、国内における知的障害者陸上競技大会の公式大会において初めてダウン症の部が開設されるなど^{19) 20)}、Virtusに同調した動きが国内においても見られ、今後は、このようなII2に該当する選手の発掘や育成に加え、VirtusによるII3のエリジビリティ判定基準の確立や公式競技化に先立って、日本国内におけるII3に該当する選手の発掘や育成に向けた調整が求められる。

4. ま と め

本稿は、グローバルゲームズとして初めてII2とII3の競技種目が開催されたプリズベン大会に着目し、その導入状況について報告したものである。プリズベン大会はVirtusの理念が具現化され、さらに新しいエリジビリティグループの潜在的需要が示された意義深い大会であった。一方、エリジビリティの判定基準について、II2の判定基準が未だ流動的であることと、II3の判定基準の公式化の課題が示され、さらなる派遣国と選手の増加に向けた課題解決が求められている。

今後は、本稿で明らかとなった、新しいエリジビリティグループの選手派遣上位国であるオーストラリアやフランス、さらにII2の選手派遣比率が最も高かったエジプトなどと連携しながら日本国内における競技者支援のあり方について検討し、2022年のVirtus初のアジアオセア

ニア地域大会（ブリズベン市）²¹⁾、2023年の第6回グローバルゲームズフランス大会（ヴィシー市）¹⁷⁾におけるII2およびII3の選手派遣に目標を定め、JPC、ANISA、各競技団体が新しいエリジビリティグループの選手の発掘の仕組みや支援のあり方について検討し実践する必要があると示された。

謝辞 ブリズベン大会の各国エントリー状況に関するデータを提供して下さった、同大会本部長であり、Sport Inclusion Australiaの最高責任者であるRobyn Smithさんに、心より感謝申し上げます。

註

註1) 大会の正式名称は「INAS Global Games Brisbane 2019」（英語表記）であるが、本稿では、JPCとANISAの表記方法を参考に日本語の大会表記を使用した。また、同大会閉会式において「INAS」から「Virtus」への改名がアナウンスされた。

註2) スペシャルオリムピックスはもう一つの知的障害者スポーツの国際団体であり、登録者数は世界で575万人である²²⁾。同団体は、継続的なトレーニングとその成果の発表の場という位置付けの競技会を開催している²³⁾。一方Virtusは国際パラリンピック委員会の加盟団体であり、選手のパフォーマンスの向上や競技性の高い競技大会の開催を目標としている¹⁾。

註3) 7個の骨からなる首の骨（頸椎：けいつい）の上から1番目の環椎が2番目の軸椎に対して前方へずれる不安定な状態で、ダウン症に頻度が高いことで知られ、ダウン症の10～30%に環軸椎不安定性があるといわれている²⁴⁾。

引用文献

- 1) Virtus (online) About us: Who we are. <https://www.virtus.sport/about-us/who-we-are/who-we-are> (2020年12月27日閲覧)。
- 2) Virtus (online) Applying for athletes eligibility. <https://www.virtus.sport/about-us/athlete-eligibility/applying-for-athlete-eligibility> (2020年12月27日閲覧)。
- 3) Burns, J. (2018) A reminder about eligibility - new classes, what they are, research progress. 「INASアジア年次総会」プレゼンテーション資料。
- 4) 宮崎伸一 (2019) 競技性の高い知的障害者スポーツの拡大への国際知的障害者スポーツ連盟の取り組み. スポーツ精神医学, (16) : 17-21.
- 5) Burns, J. (2019) personal communication, December 6.
- 6) 谷口広明・井上明浩 (2019) 国際知的障害者スポーツ連盟 (旧 INAS) による初クラス分け導入状況報告. 「2019年日本アダプテッド体育・スポーツ学会」プレゼンテーション資料。
- 7) DePauw, K.P. and Gavron, S.J. (2005) Disability Sport (2nd ed.). Human Kinetics, pp. 89-97.
- 8) Brittain, I. (2016) The Paralympic Games explained (2nd ed.). Routledge, pp. 204-209.
- 9) INAS Global Games Brisbane 2019 (online) <https://gg2019.org> (2020年12月27日閲覧)。
- 10) Inside the games (online) Queensland revives bid for 2032 Olympics and Paralympics. <https://www.insidethegames.biz/articles/1101682/queensland-bid-2032-olympics-paralympics> (2020年12月27日閲覧)。
- 11) Brisbane city council (online) Disability, access and inclusion: INAS Global Games 2019. <https://>

- www.brisbane.qld.gov.au/community-and-safety/community-support/disability-access-and-inclusion (2020年12月27日閲覧).
- 12) Smith, R. (2020) personal communication, November 30.
 - 13) INAS Global Games Brisbane 2019 (online) All INAS Global Games Sport Results. <https://gg2019.org/results> (2020年12月27日閲覧).
 - 14) Virtus (online) Athlete eligibility: eligibility master list. <https://www.virtus.sport/about-us/athlete-eligibility/eligibility-master-list> (2020年9月1日閲覧).
 - 15) 全日本知的障がい者スポーツ協会 (online) 加盟団体. <https://anisa.or.jp> (2020年12月27日閲覧).
 - 16) 全日本知的障がい者スポーツ協会 (online) プリズベン2019 INAS グローバルゲームズ競技大会—実施報告書. <https://anisa.or.jp/pdf/works/report.pdf> (2020年12月27日閲覧).
 - 17) 全日本知的障がい者スポーツ協会 (online) 医科学的視点から考えるダウン症を含めた知的障がい者アスリートへの安全な指導方法について (国庫補助金事業) の開催について. <https://anisa.or.jp/news/20201012> (2020年12月27日閲覧).
 - 18) Virtus (online) Global Games Vichy France 2023. <https://www.virtus.sport/virtus-global-games> (2020年12月27日閲覧).
 - 19) 東京新聞 TOKYO Web (online) 障害者スポーツに国内初の「ダウン症の部」保護者から多くの反響, 今後は団体競技でも. <https://www.tokyo-np.co.jp/article/63722> (2020年12月27日閲覧).
 - 20) 一般財団法人 (online) 令和2年度宮崎陸協主催競技会要項: チャレンジアスリート記録会. http://www.miyariku.org/youkou/09_challenge.pdf (2020年12月27日閲覧).
 - 21) Virtus (online) Virtus Oceania Asia Games Brisbane 2022. <https://www.virtus.sport/inaugural-virtus-oceania-asia-games-announced-for-2022> (2020年12月27日閲覧).
 - 22) Special Olympics (online) Our reach. <https://www.specialolympics.org> (2020年12月27日閲覧).
 - 23) 東京都オリンピック・パラリンピック準備局 (online) トップページ: 政策・発刊物. https://www.sports-tokyo-info.metro.tokyo.lg.jp/seisaku/details/pdf/sportsgames_survey-01.pdf (2020年12月27日閲覧).
 - 24) 神奈川県立こども医療センター整形外科 (online) トップページ: 環軸椎亜脱臼 (不安定症) の治療法について. <http://kcmc.jp/SeikeiHP/case/03.html> (2020年12月27日閲覧).